大空（生徒・保護者向け）２５号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　校長通信

令和2年11月12日（木）

津波防災の日

□本日の概要

○１１月５日は「津波防災の日」である。改めて防災の意義を考えて欲しい。
○気仙沼市の向洋高校は４階まで達する津波に襲われたが危機を脱した。石巻市の大川小学校は避難が遅れたが、その背後には安全だという思い込みがあったのかもしれない。マニュアルに縛られない臨機応変な判断が求められる。
○防災には公助、自助、共助という考えた方が重要である。自分だけでなく、お互いが助け合うような関係性を大切にしていきたい。

□津波防災の日

東日本大震災は平成２３年（２０１１年）のことでした。今から９年前というと、皆さんは幼稚園から小学校低学年の頃であり、直接の記憶としてはあまり覚えていないかもしれません。この震災を受けて、津波から国民の生命を守ることを目的に「津波対策の推進に関する法律」が設定され、その中で毎年１１月５日が「津波防災の日」と定められています。（１１月５日は、１８５４年の安政南海地震で和歌山県を津波が襲った際に、稲に火を付けて暗闇の中で逃げ遅れていた人たちを高台に避難させたという「稲むらの火」の逸話にちなんだものです。）

私は東日本大震災の現地を自分の目で見ておく必要があると思いながらも、実際にはなかなかその機会がありませんでした。ようやく訪れることができたのは昨年のことで、宮城県気仙沼市にある震災遺構「伝承館」と石巻市にある「大川小学校跡地」を訪れました。

□気仙沼市「伝承館」

宮城県気仙沼市にある震災遺構「伝承館」は、元々は県立向洋高校の旧校舎です。宮城県立向洋高校は水産系の学校で、宮崎に例えると宮崎海洋高校に相当し、災害に遭った旧校舎は気仙沼市の港の近くにありました。（現在は移転して新築されています。）旧校舎は被災直後の姿を留めたまま保存整備されており、震災伝承館では、映像や写真パネル等により被災の様子を生々しく伝えています。語り部ガイドから直接被災の様子を聞くこともでき、訪れた人に防災の重要性を伝えてくれます。

その感想を一言で語ることはできません。私は報道映像で何回も津波被害の様子は見ていましたが、実際の津波の破壊の跡は、想像を絶するものでした。震災当日、向洋高校で何が起きたかについては、ＨＰを検索すれば様々な資料が見つかりますが、海辺に近かった向洋高校を襲った津波は、校舎４階の高さにまで達したそうで、３階付近に折り重なった車や、流されてきた鉄筋の冷凍工場が４階の壁に激突した跡などが残っています。当時、学校に残っていた教職員と生徒は屋上に避難し全員無事でしたが、校舎を飲み込むような高さの津波が襲ってくるのを見たときは、死を覚悟したそうです。これだけ海辺にあり避難の時間もない中、向洋高校の生徒や職員が難を逃れたのは、同校の職員がまとめたレポートによると、校舎が海に近いため職員生徒とも普段から危機意識が強かったこと、１年前にチリ地震がありその経験が訓練になっていたこと、震災当日、ある程度のマニュアルを守りながらも、職員や生徒が臨機応変に判断したことなどが挙げられていました。

□大川小学校の悲劇

石巻市大川小学校は津波に襲われ、校庭に避難した７８名中７４人の児童と、校内にいた１１名の職員中１０人が死亡するという大惨事になりました。これは、市と県の責任が最高裁まで争われ、市と県に震災前の防災体制に不備があったとして、市と県に約１４億３６００万円の損害賠償が命じられました。私は、この判決を大変重く受け止めています。

当時の津波浸水予想（ハザードマップ）では、大川小学校は津波の圏外で、昔から津波が来たことがない場所として避難所に指定されていました。大川小学校は北上川の河口から約４キロ離れています。河口から４キロというと、宮崎では宮崎市役所付近になり、宮崎の小学校に例えると、宮崎小や大淀小学校などが該当します。また、北上川は川幅が広く、大川小学校付近で５５０ｍもあります。大淀川の橘橋付近の川幅が３３０ｍくらいですので、かなり幅の広い川で、津波が河川を遡上してくるという意識があまりなかったのかもしれません。しかし、実際は北上川では何と４９キロも津波が遡上し、１２キロ地点まで被害が及んだそうです。つまり、過去に一度も津波が到達したことがないからといって、安心することはできないのです。

大川小学校は円形のモダンな作りの小学校です。壁は破壊され内部がむき出しになった状態で、津波の激しさを物語っています。子供達の壁画が残っており、「未来を拓く」という文字を見たときは、私は胸をかきむしられるような思いに駆られました。

大川小学校には裏山があり、津波到達地点に印がつけられていました。この山に登っていれば助かった命もあったと思います。しかし、先生と子供たち実際は川に近い三角地帯に移動し、途中で津波に巻き込まれてしまいました。

なぜ裏山に登ろうとしなかったのか。当時の裏山には倒木や雪があり、児童を危険な場所に向かわせることにはためらいがあったというのかもしれません。しかし、もし津波が来ると分かっていれば、どんなことをしてもよじ登ったことでしょう。判断を誤らせたのは、当時の大川小学校に津波についての正確な情報が伝わっていなかったこと、さらに、「ここには津波は来ない、安全だ」という思い込みがあったことではないでしょうか。

マニュアル通りでない事態のとき、どう判断するのか。想定外のことを想定することができるのか。大川小を訪問して以来、私はずっと、「自分が大川小の校長だったら、あの山に登れと子供たちに指示できただろうか」と自問自答し続けています。

私達は災害の中に生きています。今日の「津波防災の日」のような日が設定されているのも、日常の平穏な時間を一旦止めて、考える時間を持つためです。防災に対する備えができているか、万が一を想定することができているか、改めて問い直す必要があります。

１１月５日の宮崎日日新聞に、防災には、公助の他、自助、共助という考えた方が重要だという記事が掲載されていました。自分だけでなく、お互いが助け合うような関係性を大切にしていきたいと思います。

伝承館の内部　津波で破壊された教室

伝承館の外部　校舎３階付近に折り重なった車

津波で壁がなくなった大川小学校

グラウンドからＣ地点に移動しようとして津波に襲われた

大川小学校グラウンドから見た裏山